

サービスマーケティングと建学の精神

磯岡哲也*

1. 問題の所在

コミュニティ政策学部の教育目的および人材養成の目的は、以下のとおりである。それは、「淑徳大学の教育に関する規則」の第2条四号に明記されているように、「地域社会とともにコミュニティを形成するために必要となる基礎的な知識と実践的な能力を育成するための教育を行うとともに、地域の発展の基盤となるコミュニティの形成に関する研究を通して、広く社会開発や地域開発への貢献」を目的とし、「コミュニティ形成に関する諸課題」に対し「幅広い視点からの問題分析や課題解決のための方向性を見出し」、建学の精神である「社会開発や地域開発に貢献することができるゼネラリストの養成」を目指している。

コミュニティ形成の研究による「社会開発」や「地域開発」に貢献する人材の育成は、すなわち「人間開発」であるが、それはとりもなおさず建学の精神に由来する。新学部は、このような教育目的に合致したカリキュラム体系とそれを担う教員組織を整備して発足したが、目的達成の方法として、サービスマーケティングを採用したことが特徴といえる。

サービスマーケティングは、従来のインターンシップとボランティアの中間に位置し、両者の利点を兼備した体験学習の実践方法である。このサービスマーケティングと淑徳大学の建学の精神との連関については、拙稿にて簡潔に紹介した（磯岡哲也 2009）が、対象読者や紙数の限定もあり、舌足らずの感が否めなかった。サービスマーケティングは、先行する米国の定義や事例がある程度紹介されてきており、我が国でもいくつかの大学で採用されている。しかし学士課程教育におけるサービスマーケティングのあり方については、見るべき論考はまだそれほど多くないように思われる。他方、本学の建学の精神は、学祖長谷川良信の教育理念に外ならず、これも長谷川仏教文化研究所や本学教員による研究が蓄積されているが¹⁾、両者を架橋するような視点での考察は皆無である。

本稿は、まずサービスマーケティングにかんする近年の研究動向を概観したうえで、既存の定

*コミュニティ政策学部 教授

義等を検討し、次に学祖の「社会開発」や「地域開発」の教育理念を振り返り、さらにサービスマーケティングと建学の精神との普遍主義的な連関を本学の特殊主義的な事例を通して考察するという構成をとる。そしてそのなかで、淑徳型サービスマーケティング構築についての若干のパースペクティブが示されることになる²⁾。

2. 近年の研究動向

サービスマーケティングに関する研究は、加速度的に蓄積されつつあるとあってよい。そこには、教育学的なサービスマーケティングの前史および発端、サービスマーケティングの定義、アメリカにおけるサービスマーケティングの展開、我が国における導入と実践、振り返りの意義と方法、建学の精神との関連など、研究視点の分化が認められる。このなかで、コミュニティ・サービスマーケティングにかかわるものとして、最近出された成果にいくつか触れていく。

桜井政成と津止正敏らは『ボランティア教育の新地平—サービスマーケティングの原理と実践』において、サービスマーケティング原理と、内外の実践例を多く紹介した(桜井政成・津止正敏 2009)。14章立てのうちジャコビーによるサービスマーケティングの定義や概念を詳述した「こんにちの高等教育におけるサービスマーケティング」(山田一隆訳)や、桜井・山田「日本の高等教育におけるボランティア活動支援・サービスマーケティングの現状」、津止・桜井「立命館大学における「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」は示唆に富む。桜井・山田は、我が国の2004年度から2007年度の特徴GPと現代GPのうち、サービスマーケティングを含むものが漸増し、2007年度においては前者で38%、後方で55%に達したと報告している。津止・桜井は、立命館大学で現代GP採択を契機に、正課と正課外で地域活性化に向けたサービスマーケティングの実践内容を報告している。このなかで、サービスマーケティングが、支援される側から支援する側への学生のロールチェンジを促進させるという視点と、専任の担当教員を配置したボランティアセンターの運営が紹介されている。

山田一隆と井上康夫は、サービスマーケティングにかかわる学生への参考書として米国の初年次教育のブックレットであるコナリーの『学びのコミュニケーション』とワッツの『サービスマーケティング』の2巻を合わせて1冊として訳した(サラ・コナリー、マージット・ミサンギ・ワッツ 2007、山田一隆・井上康夫(訳) 2010)。ことにワッツは、サービスマーケティングの定義、目的、学生と地域にとっての効果、振り返り、プロジェクトの多様性、着手などを解説し、ワークシートや自己評価シートの実物が示されている。

コミュニティ・サービスマーケティングの実践例として、注目すべき教育成果を報告しているのが、関西国際大学である(関西国際大学GPプロジェクト 2009)。2006年に現代GPに採択され、地域の子どもも関係、住民団体、社会福祉施設、行政機関との交流を通じて、学生と教員が地域課題を発見、問題解決の学習、解決方法の提示、解決への取り組み、結果の評価

という一連の活動のプロセスを報告している。

その他、中村智子らの調査では、現在我が国でサービスラーニングを実施している大学・短期大学は、13校を数え、それぞれの大学のプロジェクト名、科目名、シラバス、活動内容、サービス対象、GPなどの選定等が一覧されている（中村知子他 2010:27）。このように、サービスラーニングは、理論、実践両面からの研究の促進に寄与するものと思われる。

3. サービスラーニングとは何か。

サービスラーニングは、90年代以降、米国の大学で本格的に導入され、一般にボランティア活動を取り入れた教育手法として理解されている。これは奉仕活動を通して、地域の住民の役に立ったという実感と自己の成長感を得る体験をさせる体験学習である。日本でも今世紀に入って、立命館大学、関西国際大学、筑波大学、国際基督教大学などで先行して導入されている。

文科省の「用語解説」によれば、サービスラーニングは次のように説明されている（文部科学省：2008）。「教室でのアカデミックな学習と地域社会での実践的課題への貢献を結びつけた経験学習の一形態である教授・学習法。地域社会における現実の問題を解決するという課題を、教室で学んだ知識を活かして取り組むことにより、学習内容について深められると共に、市民的責任を学び、市民としての社会参加を促進するといわれている。アメリカでは広く採用されている。」ここでは、サービスラーニングの典型であるコミュニティ・サービスラーニングの例で説明している。しかし、これはサービスラーニングの一形態を説明したに過ぎない。

サービスラーニングには、実践の試行錯誤が先行し、一元化された定義はないとされる。これはむしろ実践のヴァリエティに応じた多様な定義が可能であるという意味であろう。しかし一元的定義はなくとも、もし欠けていたらもはやサービスラーニングでなくなるような、外してはならないキー概念は存在する。

米国の公的機関である National Service-Learning Clearinghouse によれば、「サービスラーニングは、学びの体験を豊かにし、市民としての責任を教え、コミュニティを強固にするために、意味のあるコミュニティサービスと授業および振り返りを合体させる教授と学修のための戦略である」とされる³⁾。

また、ジャコビーによれば、「サービスラーニングとは、学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形式である。省察（reflection）と互惠（reciprocity）はサービスラーニングのキー概念である。」（Jacoby 1996, 山田一隆（訳）2007 44-45）

このように教室での授業とコミュニティでの相互作用を経た体験を統合させたサービス

(3)

ラーニングは、コミュニケーション能力等の習得はもとより、サービス実践による社会貢献の成就感と感謝を得たという自尊感情の獲得、さらには課題解決の発見と解決のための政策を考える姿勢を養うという「市民性」の涵養をも目指せる複合的目標をもった学習であるということが多く指摘されている。

先進的な大学では、教育目標に応じてサービスラーニングをそれぞれ独自に規定している。筑波大学人間学群では、サービスラーニングを「教室で学ばれた学問的な知識・技能を、地域社会の諸課題を解決するために組織された社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ取ってもらうことを目的とした教育方法⁴⁾」と、地域社会を含意したコミュニティの文脈で定義している。

関西国際大学では、「大学教育と社会貢献とを融合させた活動であり、教室の知と社会実践をリンクさせる教育方法」と定義づけ、「学びの目的をより明確にし、自らの専門知識や社会に対する責任感を養うとともに、問題解決力やコミュニケーションの力なども高め」られるとしている⁵⁾。

サービスラーニングと地域社会との関連性をどう考えるかについて、若槻健が自己実現と地域貢献といった対称軸によってサービスラーニングを類型化している(若槻健 2007: 24-25)。すなわち、自己実現型(学習者の自己実現重視)―カリキュラム活性化型(学習の活性化重視)―自己効力感型(自己存在意義発見重視)―地域貢献型(貢献重視)の4類型で、後になるほど地域との関係が深くなるとしている。なお、()内は筆者なりの補足であり、それぞれ何を重視するのかを端的に表現している。サービスラーニングが学士課程教育の一角を占めるのであるなら、その内容や方法に多様性や特色があることが自然であり、このような類型化の試みは有益であろう。

さて、我が国の大学におけるサービスラーニングは、現実的にはコミュニティ・サービスラーニングと海外サービスラーニングに二大別されて実践されていることが多い。これのどちらに力を入れるかはそれぞれの大学の教育上の特色となっている⁶⁾。

本学コミュニティ政策学部においては、先述した教育目標の観点から、コミュニティの課題を発見しその解決法を探るためのコミュニティ・サービスラーニングとしてよい。そこでの具体的な目標は、コミュニティの課題発見や政策提言といった専門学習への動機付けにある。そのためにコミュニティでの経験(experience)を終えた後、学生自身が何を学び取ったか振り返り(reflection)を行う。具体的には、活動記録をつける、活動体験を共有するミーティングの場を持つ、学んだことをレポートにまとめる、それを全員の前で発表するなどのプロセスを繰り返すことになる。たとえば地域イベントでの活動を通じて、地域社会の方々とのやりとりから何を学び、成長感を感じられたかを文章にまとめ、それを発表し合い、質疑応答も行う。担当教員はそれぞれの過程に介入し、学習活動の促進者として学生の状況に

合わせて学生を支援するのである。

このようなサービスラーニングが、各大学で導入されている要因として、前著では、米国の大学教育の影響と、奉仕活動・体験活動や学士課程教育を盛り込んだ中教審答申、文科省のGP等の重視などの外発的要因を挙げた（磯岡哲也 2009）。これに加え次節では、建学の精神や設立の理念といった大学ごとの内発的なものに着目していく。内発的要因こそが、具体的なサービスラーニングのあり方を具体的に規定すると考えられるからである。ことに人間開発、社会開発、地域開発の理念を戴いて開かれたコミュニティ政策学部の場合は、サービスラーニングを実践する際には見落としはならない要件であるものと思われる。

4. 長谷川良信にみる建学の精神

学祖長谷川良信は、宗教者、社会事業家、そして教育者として広く知られている。学祖の教育の理念を端的に表現すれば、「For Him（他者のため）ではなく、Together With Him（他者と共に）」という共生の精神を指摘することができる。具体的には、宗教・社会福祉・教育の三位一体に基づく人間開発・社会開発に貢献する人材の育成がそれである。

長谷川良信研究は、社会福祉学や宗教史、発達心理学など多様な視点からの成果の蓄積がなされてきた。ことに、長谷川匡俊や大乘淑徳学園附置の長谷川仏教文化研究所によるものが少なくない。なかでも長谷川匡俊は近著『社会派仏教者長谷川良信の挑戦－宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発－』のなかで、社会派仏教者（長谷川匡俊 2010）」という新しい見方で学祖を説明している。これは、藤吉慈海の「浄土宗社会派」（藤吉慈海 1979 238-239）の用語からヒントを得たものであり、宗派の枠にとらわれない学祖のスケールの大きさを表している点で刺激的であるといえる。

本稿は、学祖の生きた時代性や全生活史をおさえたうえで、その教育理念をある視点から説明することを目指すという、いわば長谷川良信研究の大河のなかにわけ入ることを期すものではない。大学教育におけるサービスラーニングは、自ずとその建学の精神を反映する形態になるという仮説的視点に立って、淑徳型サービスラーニングの可能性を求めることをねらいとする。そこで本節は、長谷川匡俊の近著に依拠しつつもやや独自の視点から学祖の語録を採りあげて、学祖の教育理念とサービスラーニングの原理との関連性をみていく。

その副題「宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発」は、学祖の理念を的確に表現している。ここで、三位一体はキリスト教正統神学と同じ表現で三つの位相や働きは異なるが、同時に一つのものであるという意味合いで使用されている。学祖のなかでは宗教・社会福祉・教育は三つにして一つであったと思われる。ことに宗教と教育の関係は、大巖寺と淑徳大学という二つの語で語られている。

私は、大巖寺と淑徳大学というものを二元的には考えたくない。二にして一、一にして二であって、大巖寺なくして淑大立たず、淑大あってこそ大巖寺檀林の道統は真に顕彰されるものとし、ここに淑大成立とともに『大巖寺文化苑』（従来の文化センターを改称）なるものの設置展開を構想するものである。

われわれ社会事業近來の目標は、「社会開発」とか「社会計画」とかに極めをなすのであるが、日本はまだ国内において幾多の後進地域があり、文化のアンバランスがあり、思想的・知能的・道徳的・経済的貧富の格差が甚だしい今日であるから、これ等の盲点、難点を打開して真に人間の福祉を図り、文化の普及を期すべき「社会開発」なり「社会計画」は、社会福祉事業の必要喫緊の課題なのである。

この点に関し、広い意味の『宗教』、なかんづく仏教寺院の振興、少なくともその存在価値・社会的意義として、寺院機能の思いきった現代的開眼による人間開発・社会開発への、捨て身の七万寺院総蹶起が行われなければならないのである。－中略－

而してわたしが社会事業に挺身して五十年。いま老廢為すなくして偏えに思うところは、「大業は一代にして成らない」の一語である。こうして次代育成の奉仕こそが、我が晩年の志業となり、ここに「大学」の建設へと取り組んだのである。まさに「人間開発」の極地というべきであろう。しかもその志を憐み給う大願業力の催すところ、宿縁開発してこれを我が大巖寺の伝燈下に嶄然造立するに至ったことは、何たる人生の大快事であろうか。愚劣凡夫、私の如きものでもこの天地の恩賚を恣にすることができた。爾今以往、尽未来際を通じて、社会開発・社会福祉・留魂鏤骨の計をなし、十年来の文化センター構想を千葉文化圏構成の中軸として、淑大二学部大成と大巖寺文化苑の企画における隣保館中心の総合社会事業の期成整備を念願するものである。

これは実に報恩謝徳のための我が残余の奉仕であるばかりでなく、郷党一味、後継百年の超発菩提心である。(長谷川良信, 1964.12.17.「指向 大巖寺文化苑の再興」『随縁随想』, 343-345)

学祖は、大巖寺と淑徳大学は「二にして一、一にして二」であるとして、それを大巖寺文化苑の形で構想し、社会福祉事業の喫緊の課題は、当時の国家政策の用語である「社会開発」や「社会計画」だとした。そのためには広い意味での宗教、とくに仏教寺院の役割を強調し、「人間開発」の極地である大学の建設に取り組んだことを表明している。ここでの社会開発は、長谷川匡俊によれば、政策におけるそれとは意味合いが異なるという。それは人間開発と対になったもので、人間開発を抜きにしては考えられず、しかもそこでの「人間」は全体ではなく、一人ひとりの実存をもった自己実現すべき存在であるとする。長谷川匡俊の表現によれば「宗教は宗教として、福祉は福祉として、教育は教育として、それぞれ固有の領域をも

ちながら、その領域を超えて相互に密接に関係を結びながら協力し、人間一人ひとりの自己実現に寄与する」かたちが、「宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発」の真意であるという。これは学祖の三位一体の思想を説明するものとしての的を射ているように思われる。寺院（大巖寺）と大学（淑徳大学）、両者を包含する地域の文化センター（大巖寺文化苑）間の有機的連関がここに明示されているといえよう⁷⁾。

学祖が淑徳大学の役割として、教育と研究に加え「地域開発」を掲げている資料は少ない。

そもそも我が学園が、今日のいわゆる『国造り人造り』の線に沿うて、大学に施設しある社会福祉学部を拡充して、救国済民のためのより良き地域社会の形成をめざしこれに役立つべき個人福祉のために社会事業家とともに、町造り国造りのための地域福祉事業家を育成しようとする発願を取てるのも、鬱勃たる塊根、止むに止まれぬものがあるからに外ならない。（長谷川良信，1963.7.31.「指向」『随縁随想』，293）

第二に、淑徳大学そのものの構想であるが、大学としてはいわゆる、一、教育。二、研究。三、地域開発。の三つの機能を不断に最大級に実現実施すべきであるが、特に本学所在の大巖寺が浄土宗の檀林として四百年來、学僧育成の道場であり、また開創者・道誉上人以來、二代虎角、三代靈巖など時代指導の英俊相次いで輩出した名利であり、また特に地域開発文化昂揚の先驅をなした実績の深淵なのにかんがみ、先ず以て経世済民のための学問たる応用社会学または社会福祉学部の設立を、昭和四〇年度の施設としてこれに社会福祉・児童福祉の二専攻を置き、つづいて次年度に家庭福祉・産業福祉専攻を加え、さらに二～三年内に家政学部または文理学部を設け、概ね二学部編成の大学たらしめたいと考えるものである。（長谷川良信，1964.5.30.「指向 大学の構想」『随縁随想』，325）

「救国済民のためのより良き地域社会の形成をめざし」、「町造り国造りのための地域福祉事業家を育成しよう」として「大学としてはいわゆる、一、教育。二、研究。三、地域開発。の三つの機能を不断に最大級に実現実施すべきである」としている。ことに大巖寺が、古より「地域開発文化昂揚の先驅をなした実績」があることから、多彩な専攻や学部の増設を短期間のうちに行う計画を開陳している。

地域福祉やコミュニティへの関心は、学祖の青年期におけるセツルメント活動の経験が関係しているものと考えられる。それは当時の社会福祉学の最先端の用語を用いて表現されている。

地域福祉の部面については、英米等の先進国においては早くから地域社会組織運動(C・C)として、特定のスラムとか庶民地帯とか或は都市農村とかに社会改造の企画が進められ、めざましい実績を示し、今日さらに未開発的社会に対する社会開発運動(C・D)や地域社会改造計画(C・P)にまで推進されているにもかかわらず、日本社会事業のこの部面は、戦後極めて低調であることを看過できないのである。

筆者は、日本における近代社会事業の草創期において、個人の救済、保護、福祉のための社会事業とともに、地域社会(市町村など)を全体として改良し、革新し、振興することの重要性を提唱して、西欧のセツルメント事業ないしコミュニティー・センター事業に対比し、日本隣保事業の全国的設定を企画したことがある。(長谷川良信、1963.7.31.「指向」『随縁随想』, 291-292)

学祖は、淑徳大学の第一回の教授会にて、徹底した実学主義と地元千葉市への関心を開学の指針として示している。

本学としては、特に社会事業の実際家として適切なイメージを見つめてゆきたい。いくなれば栄養学を身につけた良い調理師のようなケースワーカー、又は諸職の棟梁として一軒の家を建て上げるとか、一つの町造り村造りの中心となり得るコミュニティオーガナイザーの手腕力量ある人物を期待したい。-略-

又大学の窓を社会的に開いて広く千葉市を対象として地域社会全般の保健衛生から産業労働乃至文化教養等にわたって常設的な社会調査の遂行により地区のニーズの発見、対策の樹立、さらに総合的開発進展の企画推進に不断の努力を傾注したいと思う。勿論これがためには一連の学内教職員組織の熱意ある指導垂範が基本をなすわけであるから、こうした臨床的実務実践に教育教科の重点を置き、また運営上の予算措置にも格段の用意を要する次第であるが、教授諸先生としては、いつでも現場に臨み得るような立ち上がり姿勢において陣頭指揮のご用意あっていただきたいし私自身も少なくとも週一回は学生との接心会を行って格物致知の手法を伝授したいと思う。(長谷川良信、1965.4.「教育についての論説」『長谷川良信選集 下巻』600)

学祖の大学教育への展望は建学の理念のレベルにととまらず、千葉市という地域社会における課題発見と政策立案のために、地域の実態を社会調査によって明らかにすることが繰り返し提唱されている。ここに学祖の特徴ともいえるべき社会科学的姿勢を看ることができる。

社会福祉学を学び、理想社会のあり方として福祉国家を如実に実現せしめようと努力する者にとっては、首都圏の要衝である大千葉の実態を極めることは最も肝要なことと考えます。即ち、千葉における政治・経済・文化のあらゆる様相の上に立ち、そこにどのような問題点が包蔵されているか、また盲点があり而も閑却されているか、またいかにか切実なニーズが省みられないで放置されているかなど、これらの諸点について、私共は実地踏査によってできるだけの調査を遂げ、よくこれを解明し事実を発見して、これに対処するの方途をたて、方策を明らかにしたいと思う次第であります。(長谷川良信, 1966.7.20.「指向 地域開発に資する仏者の悲願－三大学連合京葉地域総合調査団趣意書－」『随縁随想』, 390)

5. むすびにかえて

本稿の主たる目的は、大学におけるサービスラーニングと建学の精神との連関を、本学の例を通じてみていくことであった。サービスラーニングは、目的、方法、サービス先、振り返り等が多様であるため、多様な定義が考えられ、私学の場合、それは自ずと建学の精神を反映させたものになることが理解できた。

本学の場合、学祖の思想であるところの、宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発、社会開発、地域開発の理念を具現化した淑徳型サービスラーニングの構築が求められるものと思われる。その際留意すべきは、それは机上の概念操作由来のものではなく、具体的なサービスラーニング実践から経験的蓄積を経て構築されるであろうということである。じっさい、サービスラーニングの過程においては、指導者は教員だけではない。受け入れ先の学生指導の役割を担う方はもとより、継続的な相互作用をもち得たすべての方々が、学生諸君の成長の促進者となるだろう。この意味で、筆者は、顕在的であれ顕在的であれ地域またはコミュニティそのものに教育力があるという仮説をもっている。

そうであるなら、新学部における3年次の実践科目の具体的内容ははまだ計画段階にあるが、コミュニティ側のサービスラーニング過程へのなんらかの参与は、PDCAサイクルのすべて、すなわち計画や実施、振り返りにさえもその可能性があると思定される。

さて、米国と同様我が国においても、既存の文脈では、サービスラーニングは新しい教育の方法、学生のラーニングのための方法として定義されている。このことに対して異議を唱えるものではないが、宗教・社会福祉の理念を背景にした人間開発の立場からみれば、サービスラーニングを教育方法に限定して位置づけることについて再検討を加える余地があるように思われる。学祖の人間開発や社会開発には、トギャザー・ウィズ・ヒムの思想が根底にある。ラーニングの方法・手段と同時に、それ自体目的としてのサービスラーニングを思量することができないだろうか。これには、学祖の思想のさらなる研究、新学部におけるサー

ビスラーニングの具体的な目標、過程、効果等の検証、サービスとラーニングとの本質的な関係等の検討が必要になると思われる。今後の論議を俟ちたい。

擧筆するにあたって、本学における海外サービスラーニングの可能性について付言しておきたい。先行大学では、たとえば発展途上国の一地域をフィールドに選定し継続して学生を送り出すといったケースが見受けられる。新学部では、学祖の指針により千葉県とその周辺を中心に社会開発・地域開発の視点からコミュニティ・サービスラーニングを念頭においてカリキュラムやシラバスを整備している。しかし、このことは海外サービスラーニングへの消極性を意味するものではない。コミュニティ・サービスラーニングのコミュニティが海外に空間的に拡大したと捉えれば、語学の習得や異文化理解等の学習単元の付加という意味で、コミュニティ・サービスラーニングのアドバンスコースのような位置づけが可能であろう。

それ以前に、ブラジル開教というもう一つの偉業を成し遂げた学祖の思想および実践にみられるグローバル性を学ぶなら、海外サービスラーニングに取り組むことは、本学にとって自然なことであると理解できよう。紙数の関係で学祖の資料にあたることはできないが、本学の建学の精神の広量さは、海外サービスラーニングをも原理的に支えうることを、指摘しておきたい。

注

- 1) 長谷川仏教文化研究所, 1998, 「年報特集 長谷川良信に関する総合研究」『長谷川仏教文化研究所年報』22. 金子保, 2002, 『生涯発達心理研究－淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に－』, 学文社. 長谷川仏教文化研究所, 2008, 「年報特集 輪島聞声・長谷川良信 両先生の教育の思想と実践に関する総合研究」『長谷川仏教文化研究所年報』32. などがある。
- 2) 本稿は、サービスラーニングと本学の建学の精神との関連性を、学祖の理念から問うことを主目的としている。したがって、具体的なサービスラーニング実践の過程および成果を検討した関連性への言及は、他日を期すことになる。
- 3) [http://www.servicelearning.org/what_is_service-learning/service-learning_is\(2001.11.30.\)](http://www.servicelearning.org/what_is_service-learning/service-learning_is(2001.11.30.))
- 4) [http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun/k-pro/aboutSL/aboutSL.html\(2001.11.30.\)](http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun/k-pro/aboutSL/aboutSL.html(2001.11.30.))
- 5) [http://www.kuins.ac.jp/kuinsHIP/facilities/service/index.html\(2001.11.30.\)](http://www.kuins.ac.jp/kuinsHIP/facilities/service/index.html(2001.11.30.))
- 6) もっとも海外サービスラーニングの場合でも、多くの場合、活動の範囲は地域社会であることが多く、地域と関係のないケースはほとんどないように思われる。このようなことから、コミュニティ・サービスラーニングと海外サービスラーニングとの関係は、並立ではなく、包含関係にあるとみなすこともできる。
- 7) このような学祖の三位一体の思想の源泉を、宗教心理学でいうところの回心の時期である十代に求めるとすれば、芝中学在学中でのキリスト教をはじめとする他宗教との接触を指摘できる。筆者は、ことに芝中学の近隣にあったユニテリアンの惟一館との接触は注目に値している(長谷川匡俊・磯岡哲也・源昌久 1998)。

文 献

- Connolly, S, 2007: 'Learning Communities'. "Student Orientation Series" published by Pearson Education, Inc., publishing as Prentice Hall.
- 藤吉慈海, 1979, 「浄土宗社会派の人々」『宗教研究』238, 日本宗教学会.

- 長谷川匡俊, 1992, 『トゥギャザー ウィズ ヒムー長谷川良信の生涯』, 新人物往来社.
- 長谷川匡俊・磯岡哲也・源昌久, 1998, 「学祖・長谷川良信先生33回忌記念鼎談」『淑徳大学広報』123.
- 長谷川匡俊, 1998, 『長谷川良信 語録』, 大乘淑徳学園附置長谷川仏教文化研究所.
- 長谷川匡俊, 2003, 『長谷川良信のブラジル開教ーその理念と実践』, 大巖寺文化苑出版部.
- 長谷川匡俊, 2010, 『社会派仏教者・長谷川良信の挑戦ー宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発ー』, 社会福祉法人 マハヤナ学園.
- 長谷川良信, 1977, 『随縁随想ー仏教・社会事業・教育ー』, 社会福祉法人 マハヤナ学園.
- 長谷川良信, 1967, 「個人福祉と地域福祉」長谷川よし子編『長谷川良信遺稿』大乘淑徳学園事務局.
- 長谷川良信, 1973, 「社会事業とは何ぞや」『長谷川良信選集 上巻』長谷川仏教文化研究所.
- 長谷川良信, 1973, 「教育についての論説」『長谷川良信選集 下巻』長谷川仏教文化研究所.
- 橋本由紀子, 2010, 「日本の高等教育機関における「サービスラーニング」が学生に与える教育効果について」『吉備国際大学研究紀要 (社会福祉学部)』20
- 磯岡哲也, 2009, 「コミュニティ・サービスラーニングと建学の精神」『アップ・トゥー・デート』27, 大乘淑徳学園附置長谷川仏教文化研究所.
- Jacoby, B., 1996: 'Service-Learning in Today's Higher Education'. in Jacoby, B. et al "Service-Learning in Higher Education : Concept and Practices", Jossey-Bass.
- ジャコビー・バーバラ (山田一隆訳), 2007, 「こんにちの高等教育におけるサービスラーニング」『龍谷大学経済学論集』47, 44-45.
- 金子保, 2002, 『生涯発達心理研究ー淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心にー』, 学文社
- 関西国際大学GPプロジェクト, 2009, 『平成20年度現代GPプロジェクト報告書 大学, 住民及び行政等の協働と地域活性化ーシニア学生受入モデルとサービスラーニングモデルの開発』
- 森定玲子・中島智子・ダイアン・マッセルホワイト・関綾子, 2007, 「受入機関におけるサービスラーニングの意義と課題ープール学院大学の実践を事例としてー」『プール学院大学研究紀要』47
- 文部科学省, 2008, 「学士課程教育の構築に向けて (答申)・用語解説」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (2009.11.30.)
- 中村知子・藤原由美・三浦智恵子, 2010, 「サービスラーニング授業の開発」『自由が丘産能短期大学紀要』43.
- 桜井政成, 2007, 「地域活性化ボランティア教育の深化と発展: サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」『立命館高等教育研究』7.
- 桜井政成・津止正敏, 2009, 『ボランティア教育の新天地ーサービスラーニングの原理と実践』, ミネルヴァ書房.
- サラ・コナリー, マージット・ミサンギ・ワッツ, 2010, 『関係性の学び方ー「学び」のコミュニティとサービスラーニング』(山田一隆・井上康夫訳), 晃洋書房.
- 開 浩一・藤崎亮一・神里博武, 2003, 「大学におけるサービスラーニングの開発に関する研究ー概念と取組の状況ー」『地域総研所報』1-1, 長崎ウェスレヤン大学.
- 志々田まなみ, 2007, 「社会貢献活動と学習活動の融合ーサービスラーニング論ー」『広島経済大学研究論集』30-1・2
- 志々田まなみ・熊谷慎之輔・佐々木保孝, 2009, 「サービスラーニングにおけるセルフアセスメントに関する一考察ー教育的体験を学習効果につなげるための「振り返り」に着目して」『広島経済大学研究論集』32-2
- 若槻健, 2007, 「大学と地域社会をつなぐサービスラーニング」『甲子園大学紀要』35.
- Watts, M, Misangyi, 2007: 'Service Learning'. "Student Orientation Series" published by Pearson Education, Inc., publishing as Prentice Hall.

Service-Learning and the Spirit Behind the Founding at Shukutoku University

Tetsuya ISOOKA

The purpose of this paper is to clarify the relationship between Service-Learning and the thought of the president Hasegawa Ryoshin, the founder of Shukutoku University. It is said that Service-Learning is a teaching and learning strategy that integrates meaningful community service with instruction and reflection to enrich the learning experience, teach civic responsibility, and strengthen communities.

The contents of this paper are follows:

1. Analytical framework
2. Recent trends in research on Service-Learning
3. What is Service-Learning?
4. President Hasegawa Ryoshin's educational philosophy
5. Discussion

This paper emphasizes the need for construction of Service-Learning of Shukutoku type based on religion, social well-being and education form a trinity.

And it also shows a perspective on possibility of Overseas Service-Learning at Shukutoku University.